

全国大学ゴルフ指導者研究 第13号

(2023年11月)

■ ゴルフ創始期のスコットランド貴族のプレーぶり



全国大学ゴルフ指導者研究会

The Japan Society of Collegiate Golf Teaching Association

〈JSCGT〉

目 次

		%
		&
		+
	ゴルフにおけるコツと身体知	金田 晃一（千葉工業大学）
	ゴルフ指導を考える ～習熟と修正の関係～	佐伯聡史（富山大学）
	ゴルフ雑感	江口潤（産業能率大学）
	研究会の発展に向けて、今求められていることは何か	中島弘毅（松本大学）
		%
		&&
		&
		&
	2022 年度（令和4 年度） 収支決算報告書	
	2023 年度（令和5 年度） 予算	
VI.	会則・会員名簿	&

I. 巻頭言

会長 鈴木 昭彦

全国大学ゴルフ指導者研究会第13号が充実した内容で刊行される運びとなりました。刊行までご尽力を頂いた研究誌作成委員長の矢崎先生をはじめ、本会の理事の皆様には心から感謝申し上げます。

昨年2022年2月にロシア連邦がウクライナへ軍事侵攻を開始し、世界的な食料危機を招きました。特に両国の小麦・トウモロコシ輸出量が世界的に占める割合が高く、その影響によりあらゆる物価上昇に繋がり厳しい状況になっています。しかしながら朗報とも言えることもあります。5月に新型コロナウイルス感染症は5類感染症に位置づけられ、感染対策は個人や事業者の判断に任せることになりコロナ禍以前の生活にほぼ戻りました。

大学の授業においても対面授業となり、先生方が携わっている集中授業や合宿なども実践でき、活気が戻ってきたと実感されていると思います。TVでのスポーツ番組を見ても観客応援で試合が盛り上がり、熱狂することも多々あり嬉しくなります。

世界のゴルフ界においてはサウジ支援振興男子ツアーの「LIVゴルフ」1位47億円超と驚くツアーが現れました。アメリカ4大スポーツNBA、MLB、NFL、NHLに劣らない最高年俸になり、才能豊かな人材であれば世界のトップに立てるというワールドワイドなスポーツになってきています。群馬県ではコロナ禍に於いてもゴルフ練習場、ゴルフコースでのプレーヤーの人口減少は抑えられ、新たに始める人も増えています。

本研究会では初心者指導を担当する指導者の育成、授業での指導方法等について研鑽を重ねておりますが、今後の課題は研修会への参加者を増やすとともに新規会員数の増加させることだと考えます。難しい課題ではありますが、これからも会員の皆様のご協力をお願い致します。

本研究会の一層の発展と会員各位のご健勝を願って、巻頭言とさせていただきます。

II.寄稿文

自叙伝「ダウン・ザ・フェアウェイ」にみるジョーンズ流ゴルフ哲学 — 「オールド・マン・パー」の発見と勝負観 —

大澤 啓 藏 (全国大学ゴルフ指導者研究会名誉顧問)

1. はじめに

ボビー・ジョーンズ (ロバート・タイア・ジョーンズ・ジュニア) は1902年 (明治35) 3月17日、アメリカ合衆国ジョージア州アトランタに生まれ、1923年 (21歳) ~1930年 (28歳) の8年間に全米アマチュア5回、全米オープン4回、全英アマチュア1回、全英オープン3回と、合計13回の世界メジャー大会に勝利した。特に、1930年は4大タイトル¹⁾をすべて制覇し、いわゆる「年間グランド・スラム」の偉業を達成した。しかし、同年、アマチュアのままで28歳の若さで、競技ゴルフからの引退を宣言した。大きな衝撃を受けたアメリカのゴルフ界は、「ジョーンズなきゴルフは、まさにパリなきフランスと同様」と悲しんだといわれる²⁾。引退から3年後の1933年 (昭和8)、ジョージア州オーガスタに「オーガスタナショナル・ゴルフクラブ」を創立し、翌34年には「マスターズ」の第1回大会を開催した。1948年、ジョーンズ46歳の年に脊髄空洞症を発症し、晩年は車椅子の生活を余儀なくされた。そして、「球聖」「ゴルフの皇帝」と称され、現4大メジャー大会の1つ「マスターズ選手権」を創設したボビー・ジョーンズは1971年12月18日、69歳でこの世を去った (表-1.)。

表-1. ボビー・ジョーンズのプロフィール

1902年 (明治35)	ジョージア州アトランタに生まれる
1907年 (5歳)	両親と一緒にゴルフを始める
1911年 (9歳)	アトランタ・アスレチック・クラブのジュニア選手権優勝
1913年 (11歳)	ハリー・バードンとデッド・レイが地元プロと対戦するのを観戦 イースト・レーク・旧コースで最初の「80」ストロークを達成
1915年 (13歳)	イースト・レーク・クラブ選手権優勝、ドレイドヒル・クラブ選手権優勝
1916年 (14歳)	ジョージア州アマチュア選手権優勝
1919年 (17歳)	カナダオープン第2位、南部オープン第2位、全米アマチュア第2位、 全米オープン初参加
1921年 (19歳)	全英アマチュア4回戦敗退、全英オープン初参加するも3日目棄権
1922年 (20歳)	全米オープン第2位、全米アマチュア準決勝で敗退、 ウォーカーカップ出場・シングルスとフォアサムで勝利
1923年 (21歳)	全米オープン優勝、全米アマチュアでメダリストになるも2回戦敗退
1924年 (22歳)	全米オープン第2位、全米アマチュア優勝、 ウォーカーカップ出場・シングルスで勝利しフォアサムで敗戦
1925年 (23歳)	全米オープン第2位、全米アマチュア優勝
1926年 (24歳)	ウォーカーカップ出場・シングルスとフォアサムで勝利、 全英オープン優勝、全米オープン優勝、 全米アマチュアでメダリストになるも第2位
1927年 (25歳)	南部オープン優勝、全英オープン優勝、全米アマチュア優勝 <u>自叙伝「DOWN THE FAIRWAY」を発表</u>
1928年 (26歳)	ウォーカーカップ出場・シングルスとダブルスで勝利、全米アマチュア優勝
1929年 (27歳)	全米オープン優勝
1930年 (28歳)	ウォーカーカップ・アメリカチーム主将、フォアサムとシングルスで勝利、 <u>全英アマチュア優勝、全英オープン優勝、全米オープン優勝、</u> <u>南西部オープン優勝、全米アマチュア優勝、</u> (四大タイトル年間制覇) 競技ゴルフからの引退を表明
1933年 (31歳)	オーガスタ・ナショナル・ゴルフクラブを創設
1934年 (32歳)	「マスターズ」第1回大会を開催
1948年 (46歳)	脊髄空洞症発症
1958年 (56歳)	「セント・アンドルーズ名誉市民権」を授与される
1971年12月18日	死去 (享年69歳)

(ボビー・ジョーンズ著「ダウン・ザ・フェアウェイ」巻末年表などより、大澤作表)

ところで、ジョーンズは「年間グランド・スラム」を達成する3年前の1927年 (昭和2)、25歳の年に長年にわたりジョーンズに帯同したゴルフ記者O・Bキーラーとの共著で、幼少期から25歳までの自叙伝「DOWN THE FAIRWAY」を発表した。そして、原著出版から6年後の1933年 (昭和8) に近藤経一の訳により日本語版「ダウン・ザ・フェアウェイ」³⁾が出版された (写真-1.)。また、1991年 (平成3) にも菊谷匡祐訳による同名の書⁴⁾が出版されている。

近藤經一による邦訳書は旧漢字や旧平仮名使いが混在しているため読解しにくい箇所も見られるが、今日では希少本としての価値もある近藤經一の名邦訳書を紐解き、訳書原文も引用しながらジョーンズ流のゴルフ哲学について考察する。

本報告では初めに、あまりにも有名な「オールド・マン・パー」について、その発見経緯を確認する。次に、多くの試合で2位に甘んじた経験から学んだ「1打の重要性」と「ゴルフの奥深さ」について考える。さらに、メジャー大会に勝てない時期を脱する転機となった全米オープンでの心境変化から会得したジョーンズ流のゴルフ哲学と、「オールド・マン・パー」の真の正体について邦訳書の記述を紹介し考察する。先述のように、ジョーンズは自叙伝発表から3年後の1930年に当時の世界4大メジャータイトルを制覇し、前人未踏の「年間グランド・スラム」を達成した。このことは、自叙伝に綴られたジョーンズ流のゴルフ哲学であるプレー・スタイル（戦略）、勝負観（心構え）などは非常に重みのある内容であり、また多くの示唆に富むものと考えられる。

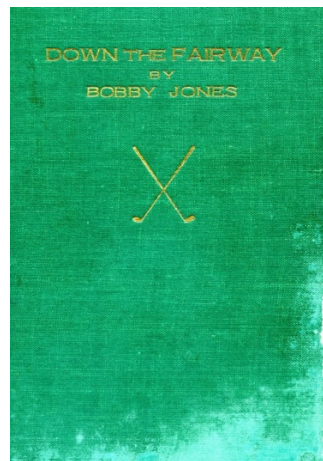


写真-1. 近藤經一訳「ダウン・ザ・フェアウェイ」のハードケース（左）と表紙（右）

2. 「オールド・マン・パー」の発見経緯（第二章「オールド・マン・パー」の発見）

ボビー・ジョーンズがゴルフを始めたのは1907年5歳の時で、両親と一緒に始めたと言われる。毎年、避暑で過ごす家の近くに「イースト・レーク・ゴルフクラブ」があり、ここに専属プロとしてスコットランドから着任したスチュアート・メイドンに両親がしばしば指導を受けており、両親がラウンドする時には、ジョーンズもクラブ1本を持ち一緒について廻ったと記している。このメイドンとの出会いが、後のジョーンズに強い影響を与えたといわれる。そして、1913年、全米オープンに参加したハリイ・バードンとテッド・レイが大会後、各地で親善試合を行うためイースト・レークにも訪れ、地元プロ⁵⁾とのマッチ・プレー戦を行った。これを観戦したジョーンズ少年はバードンのプレーに強く心を惹かれた。その記憶を第二章において以下のように述懐している。

『ハリイの態度はスチュアートやウイリイには無関心で、別の何者かに對してプレイしてゐるやうに見えた。(中略) 彼の様子は、さながら試合外の何物か或いは何人かを目標としてプレイしてゐるといふ風だった。』(39頁6-11)

その後まもなく、ジョーンズは11歳で最初の「80」を出すのだが、その時の心境を次のように記している。

『その日、私はペリイと競技してゐた。が、遂に一度もペリイの当たりはだうだろうとか、勝負の結果はどうなるだろうかなどといふことに気を奪(と)られなかつた。私はたゞ自分がそれ迄に作った記録(スコア)より少しでも好い記録が出したいと思つた。それ以外のことは何も考へなかつた。』(40頁2-5)

これらが、対戦相手との勝負ではなく各ホール基準打数である「パー」を目標とするプレ

一・スタイル（戦略）の原点であったとしている。そして、この体験が後年になり競技の挑戦相手として擬人化された「オールド・マン・パー（パーおじさん）」の発見に繋がったと以下のように回想している。

『私がカードの上にかかれた見えざる敵、しかも頑強な敵——オールド・マン・パーを向こうに廻してプレイしたのは、この時が最初だったと思ふ。』（41 頁 2-3）

3. 「ゴルフは不思議なゲーム」という達観の境地（第十章「惨憺たりし七年」）

第十章「惨憺たりし七年」において1打の重要性について語った箇所があり、章の終末部では過去に出場したオープン選手権において、実に7度も2位であったと述懐しており、悔しさも滲ませている。

『ダグラス・エドガアが十六ストロークの差で第二位者を抜いたカナダ・オープンは別として、他の場合は一ラウンドに付き一ストロークを節約すれば、皆優勝する事が出来たのだ。』（210頁8-10）

しかし、続く文においては全く反対のことを述べている。

『どんなラウンドでも後から考へると少くも一ストローク位は節約すべきだつたと思へるストロークが、必ずあるものである。だが私は夫れは皆それだけの運命なのだと思ふ。もしそのストロークを節約し得たとしても、その場合には屹度どこかで別のストロークを無駄にするに違ひないのだ。』（210頁10-13）

『と同じやうに、また一ラウンドの中には、いつだつて諸君が或ひはしくじつたかも知れないのを、うまく助かつたといふやうな幾つかのショットもあるにちがひないのだ。だから、諸君は、さういふことに就て決してクヨクヨ考へない方が宜しい。全くゴルフは不思議なゲームである。』（211頁1-4）

このように、ジョーンズは負けた経験から1打の重要性を認識している。同時にゴルフには運・不運がつきもので人智を越えた勝負の帰趨があり、しかも毎回完璧なショットが不可能であることも学び「ゴルフの奥深さ」を痛感している。さらに、「全くゴルフは不思議なゲーム」と表現するように、ある種の悟りにも近い「達観の境地」に辿り着いたのではないかと推察される。

4. 「オールド・マン・パー」の真の正体（第十七章「トーナメント・ゴルフ」）

①ナショナル選手権「初優勝」に繋がる心境変化

州選手権や全米レベルの大会に出場し始めた頃（1916年・14歳）のジョーンズはミスショットのたびにクラブを投げつけたり、初出場の全英オープン（1921年・19歳）の3日目には、不満なプレーに腹を立ててスコアカードを破り、途中棄権したりするなど未熟な時代があった。そして、1923年（21歳）までの7年間のナショナル選手権に11回出場したが1回も勝てない時期を経て、転機が訪れたのはインウッドでの全米オープン選手権（1923年・21歳）であった。この試合中にジョーンズの心境に変化が表れ、結果として初優勝を飾っている。その時の心境について第十七章で次のように綴っている。

『私はかういふことを考へ始めた。難關といふものは決して私一人だけに來るものではなく、他の人も皆それぞれの難關にぶつかるのだといふことを。』（336 頁 10-11）

『トーナメントのための緊張といふものは獨り私のみではなく、總ての人を襲ふものであるということを知りはじめたと思ふ、』（337 頁 1-3）

『一つミス・ストロークは何も急いでそれを取りもどす必要のあるものではない。またそれは決して自分を破滅させるものでもない。他の人達も、また、きつとさういう一つミス・ストロークをやるものだ』（337 頁 3-6）

大試合の経験や多くの失敗から「皆それぞれの難關にぶつかる」「トーナメントの緊張は皆を襲う」「ミスは自分を破滅させるものでなく、急いで取り戻す必要はない。他の人も同様なミスをする」などトラブルや緊張は誰をも襲うという覚悟と自分だけではないというある種の安堵感、ミスをして冷静に対処するポジティブな思考法など、ジョーンズ流のゴルフ哲学を会得したものと推察できる。

さらに、同年行われた全米アマチュア選手権では決勝マッチ・プレーの2回戦で敗れたのだが、予選のストローク・プレーでメダリストを決めるチェック・エバンスとのプレー・オフの時の心境についても触れている。

『彼に二ストローク負けてゐたときには、私の心の様子は別だった。なんとなく、私はその負けを取りもどすことに焦慮はしなかつた。それはあだかも私の意識の奥底の方で何ものか『忍耐』といふことを囁いてゐるかのやうであつた。』 (338 頁 6-9)

『ただ、私は本能的とでもいふのだろう、ともかく、ボールを打つといふことだけに心を集めた。そしてその負けてゐるストロークを直ちにとり返さうとは試みなかつた。ところが、結果としては、それは自然と、しかも負けてゐる以上の数をもつて私のところへ帰つてきたのだ。』 (339 頁 1-4)

ジョーンズはこの頃から「忍耐」について意識し始めている。加えて、劣勢をすぐに挽回しようとするのではなく、「目前の1打に集中する」ことの重要性も理解し始めた。

② 「忍耐」の重要性を強く意識

『といふわけだから、この無神経のやうな、消極的な、全くロマンテックでない『忍耐』といふものが、恐らくはこの問題の答へではないかと私は思ふ。 (中略) それを體現する事が出来るまでには、私は長い年月を要した。そして、今日でも、やゝもすれば、それは忘れ勝ちであるが、トーナメント・ゴルフに於いては、それは決して、決して忘れてはならないことである。』 (339 頁 5-10)

『忍耐——恐らくは、これがこの問題に對しての答 (へ) であらう。そして今日私がもつてゐるところのそれを、私はこれからもつともつと助長させなければならない。』 (341 頁 4-5)

1923年、全米オープン選手権優勝後の全米アマチュア選手権で予選のメダリスト決定戦(プレー・オフ)における心境として「忍耐」について気づき意識し始めた。また、自叙伝の執筆中においてもその重要性を再認識しており、「忍耐」力をさらに強化するよう自分を戒めている。

③ 「オールド・マン・パー」の真の正体

『結論として、マッチ・プレーであらうが、メタル・プレ (メダル・プレー) であらうが、諸君の相手はオールド・マン・パーなのだ。而してオールド・マン・パーは忍耐の權化なのだ。それはバーデイも打たない代りに、決してミスもしない。彼こそは忍耐といふもの (の) 化身なのだ。だから、もし諸君が彼と一緒に長い旅行をしようと思ふならば、諸君も亦忍耐強くなければならぬ。』 (342 頁 1-5)

ジョーンズは自叙伝の終末部において「オールド・マン・パーは忍耐の權化なのだ」また、「彼こそは忍耐の化身なのだ。』と述べている。一般的に「オールド・マン・パー」の発想は、対戦相手ではなく各ホールのパーを目標としてプレーする戦略だと理解されているが、「オールド・マン・パー」の真の正体は「忍耐」そのものである事を明かして自叙伝を締めくくっている。

5. おわりに

ボビー・ジョーンズは「年間グランド・スラム」を達成する3年前の1927年(昭和2)、25歳の年に自叙伝「DOWN THE FAIRWAY」をゴルフ記者O・Bキーラーと共著で発表した。原著出版から6年後(1933・昭和8)、近藤經一訳による邦訳書が出版されており、この邦訳書を手掛かりに有名な「オールド・マン・パー」の発見経緯および、ジョーンズ流の勝負観とゴルフ哲学について報告した。

「オールド・マン・パー」の発想は1913年に観戦したハリー・バードンのプレーぶりが発端であった。まもなく、11歳で最初の「80」を出した時のプレーでも、対戦相手との勝負ではなく自分の目標スコアを達成することに集中した。これらの体験が、擬人化された挑戦目標であり他者との勝負ではなくそのホールのパーを目標にプレーする「オールド・マン・パー」の発見に繋がっている。元々、短気であったジョーンズはやがて「忍耐」の重要性を意識し始め、ついに「オールド・マン・パー」の真の正体は「忍耐」であるという思考にまで深化したと思われる。

ジョーンズは成長するにつれ14歳頃から大競技に出場し始めたが、多くで2位に甘んじた経験から「1打の重要性」を述べる一方で、運・不運や偶然の要素が強いゲームと認識し、「全くゴルフは不思議なゲーム」と悟りに近い達観の境地を吐露している。同時に、大試合に勝てない時期

を脱し初優勝を飾った 1923 年の全米オープンではジョーンズの心境に変化が表れ、トラブルや緊張は誰をも襲うという覚悟と他の皆も同じであるという安堵感を会得し、ミスした時にも冷静に対処するポジティブな思考（心構え）に至ったことが語られている。現代のアスリートに必須なメンタル・マネジメント技法の 1 つとして「肯定的思考」があるが、約 100 年前に 25 歳の若者ジョーンズが極限状態の大舞台で戦う中で、このような勝負観やゴルフ哲学に辿り着いたのは驚くべきことである。そして、自叙伝発刊から 3 年後に達成した「年間グランド・スラム」も、辿り着いた境地と無関係ではないと推察される。このことから、自叙伝「ダウン・ザ・フェアウェイ」で語られた天才ボビー・ジョーンズ流の勝負観やゴルフ哲学、競技ゴルフに対する姿勢は、今日の一般ゴルファーにとっても大いに示唆に富むものと思われる。

6. 引用および、注

- 1) 現在の世界 4 大タイトルはマスターズ選手権、全英オープン選手権、全米オープン選手権、全米プロ選手権であるが、ボビー・ジョーンズの時代は全英アマチュア選手権、全英オープン選手権、全米オープン選手権、全米アマチュア選手権であった。
 - 2) 攝津茂和著「ベッドで読むゴルフの本」(1975) 報知新聞社、177 頁
 - 3) ボビー・ジョーンズ著、近藤經一訳「ダウン・ザ・フェアウェイ」(1933) 目黒書店
 - 4) ボビー・ジョーンズ著、菊谷匡祐訳「Down the Fairway」(1991) 株式会社スタジオ・シップ
 - 5) 対戦した地元プロはスチュアート・メイドンとウィリー・マンであった。
- ※ 邦訳書から引用した原文は直後に頁と行を表示し巻末記載は省略した。また、引用文中の下線は筆者が任意で付した。

7. 文献、資料

- 1) 攝津茂和著「ゴルフ物語」(1960) 角川書店
- 2) 攝津茂和著「ベッドで読むゴルフの本」(1975) 報知新聞社
- 3) ボビー・ジョーンズ著、前田俊一訳「ボビー・ジョーンズ ゴルフの神髄」(1998) TBS ブリタニカ
- 4) 攝津茂和著「不滅のゴルフ名言集」(1984) ベースボール・マガジン社

※ 本研究の一部は、日本ゴルフ学会第 32 回大会 (2019. 09. 02. ~05.) において口頭発表した。

Ⅲ. ゴルフ指導者研究雑考

*本章企画について

全国大学ゴルフ指導者研究 編集委員会

全国大学ゴルフ指導者研究会第13号編集委員会にて、「ゴルフ授業、ゴルフ指導について研究会会員の考えをぶつけ合う場が不足しており、本誌をその場にしては」との意見が賛同され、本研究会のあり方を加えて、募集することになりました。今回は、初回ということもあり、研究会全会員ではなく、数名の先生に下記提案を行い、執筆いただきました。

編集委員会は、今後も本企画を継続していきたいと考えております。研究会会員の皆様には、批評、批判、賛同等の意見や新たな視点の提示を含め、是非、自らの見解を本誌にぶつけていただきたいと願っております。また、本章名を「ゴルフ指導者研究雑考」といたしました。より良い名称の提案もお願いいたします。編集委員会から個人にお願いすることもあるかもしれませんが、何卒よろしくお願いいたします。

下記に関する論文、報告、紀行文等を募集いたします。

1. ゴルフ指導を考える

a. 体験

大学授業、個人的なコミュニティーでの指導、スクールなどで受講した指導等の経験からゴルフ指導について個人的に思うこと。

b. 理論

ゴルフ技術論を含むゴルフ指導の著書、雑誌、youtube、web等について個人的に思うこと。

2. ゴルフ授業の意義

教材としてゴルフを实践する意義について、個人的に思うこと。

3. ゴルフ研究会について思うこと（改革案、進むべき道等）

個人的な思いでかまいませんので、どしどし応募ください。よろしくお願いいたします。

ゴルフにおけるコツと身体知

金田 晃一 (千葉工業大学)

1. はじめに

人が行うほぼ全ての身体運動は生まれてすぐにできるものではなく、それ相応の年月日をかけて獲得される。ある身体運動を行うはじめの頃はその動作をうまく行うことができず、意識的に試行錯誤しながら繰り返しその動作を練習する中でスムーズな動作を獲得していき、やがて無意識にその動作を行うことができるようになっていく。このような運動学習（一定の課題の練習を行なった結果として運動パフォーマンスが向上すること[田中, 2013]）の過程の中で、人はある身体運動に対するコツをつかんでいく。では、身体運動におけるコツとはどのようなものであろうか。また、どのようにしてコツをつかむことができるのであろうか。これらとゴルフとの関係について考えてみたい。

2. 身体運動におけるコツとは？

田中[2013]はメルロ=ポンティの身体図式論の観点から、運動学習においてコツをつかむ経験を次のように記述している。

・学習中の身体運動がまだできていない状態では、身体各部位の動きが全体として協調・協働しておらず、いわば「ばらばら」である。

・練習を続けるうちに、完成された運動のイメージに沿って身体を動かそうとする意図と、実際の身体の動きとが、たまたま一致する瞬間が訪れる。

また、コツをつかむことをとおしてはじめて「ある運動や動作の方法を『身体が知っている』状態が出現する」とも述べている[田中, 2013]。このことから、試行錯誤しながら繰り返し練習を重ねる中で、運動イメージと実際の運動が一致する経験を自分自身の中に組み込んでいくことで獲得されるものがコツであると考えられる。

上記を踏まえると、身体運動におけるコツは、身体運動を行うその人個人に特有のものであると言える。つまり、コツはその人本人のみが理解できるものであり、客観的に観察することができる動作などでもなく、個々人それぞれによっても異なる。例えば長嶋茂雄読売ジャイアンツ終身名誉監督は、他の野球選手に対する指導の際に「ダッ、パーン」「パッ、サッ、タッ」「ヴワァー」などのオノマトペを多用しており、バラエティー番組などで取り上げられることが多くあった。これらのオノマトペは長嶋監督にとってのコツを自分自身の感覚に従って言語化したものであると思われるが、これをそのまま他の野球選手が理解することはほぼ不可能であろう。スポーツの現場においてコツを表現するものとしてオノマトペが用いられることは多く、コツを表現し伝えることに対する有効性や利便性を評価している人もいるが、曖昧性と理解困難性を指摘している人もいる[吉川, 2013]。

以上のことから、身体運動におけるコツは、結局のところ自分自身でつかんでいかななくてはならないものであると考えられる。それでは、どのようにしてコツをつかむことができるのであろうか。田中[2013]は「コツをつかむことで無意識にその運動を遂行できる状態へと変化し、『身体知』として成立したと呼びうる状態になる」と述べている。

3. 身体知とは？

身体知とは「身体に根ざした知」であり、広義には「身体と心と社会のすべてに根ざして存立する知」である[諏訪, 2017a]。さまざまな身体知に関する解説は人工知能学会の学会誌「人工知能」の32巻2号にて特集「身体知の発展」が組まれており、これを参照されたい。一般には身体が覚えこんだ（獲得した）技やコツを指して「身体知」と呼ぶことが多い[諏訪, 2005]。身体知は言語化する必要がないもの、あるいは言語化すること自体が身体知の妨げになるという考え方があるが、諏訪[2005]は、言語化が難しい身体知をあえて言語化することで身体知が獲得できるとし、「からだメタ認知」という手法を用いた一人称研究による身体知獲得のプロセスを紹介している[諏訪, 2022]。諏訪[2022]によると、「からだメタ認知」とは「外界から五感を通して感じたものごと（知

覚)」や「自身の身体の内なる体性感覚（体感）に自覚的に意識を留めて、ことばで表現しようと努力すること」であり、これが身体知=コツの獲得に繋がっていく。つまり、自分自身という一人称視点に立ち、環境との相互作用の中で、何をどのように感じたかという感覚や経験を言語化することであると言える。言語化は、体感の微妙な差異に気づき、これを持続的に留意するための手段であり、言語化しなければその時に得た感覚が消え去ってしまう[諏訪, 2022]。また、言語化の際は体感や知覚を論理的に説明するのではなく、自身に語りかける独り言のように言語化することが重要である[諏訪, 2022]。

諏訪[2022]は、身体運動におけるからだメタ認知についての事例を著書の中で紹介している。また、これに類似した取り組みとしてスポーツ活動における「練習日誌」が挙げられよう[澤野, 2019]。練習日誌はからだメタ認知そのものではないかもしれないが、日々の練習を振り返り、自分自身の感覚を言語化して書き残していくことで、身体知=コツの獲得へと繋げていくことができるであろう。

4. ゴルフにおけるコツと身体知

ゴルフに関する指導書や情報誌は数多く出版されており、近年ではYouTubeに代表されるオンライン動画においてもゴルフに関する非常に多くの情報が日々配信され続けている。しかし、それらの情報の多くは指導者自身の主観的な経験や感覚に基づいて構成されたゴルフのスイング理論であり、全体としてさまざまな理論が混在している状態であることはいくつかの書籍でも言われている[松本, 2020; 三觜, 2022]。主観的な経験や感覚は一人称視点で語られるコツである場合が多く、その指導者にとっての良い理論ではあるが、その理論をそのまま他者にあてはめることはほぼ不可能であろう。しかし最近では、スイング理論ではなくゴルフボールに直接作用するゴルフクラブの扱い方に着目し、物理法則に従ったクラブの正しい扱い方を記載した指導書が出現している[松本, 2020]。松本[2020]によると、既に欧米諸国では物理法則に従ったクラブの扱い方に基づいた指導が行われているが、日本はこの点において随分と遅れているようである。ゴルフのパフォーマンスはボールがどのように飛びどこに止まったかで決定され、ボールに直接作用するのはクラブであるから、クラブを正しく扱うことが重要であることは当然である。しかし、クラブを扱うのはプレーヤー(人)であるため、クラブの正しい動きとはどのようなものかについてはここでは触れないが、プレーヤーはクラブを正しく扱うためのコツをつかむ必要がある。

まず、最初に行うことは、主役となるクラブの正しい動きをイメージすることである。そして次に、イメージしたクラブの動きが再現できるように身体運動を行う。どのような身体運動を行うべきかについては、試行錯誤を繰り返しながら練習を重ね、クラブと身体を含んだ全体的な運動イメージを何度も再構成していく必要がある。この段階では指導者や動画などによるフィードバックも十分に活用することが重要となる。そうしていくうちに、全体的な運動イメージと実際のクラブや身体の動きとが一致する瞬間が訪れ、おそらくその際には理想的なボールが打ち出せるであろう。

これをコツとして獲得するためには、練習するごとにその際の体感や経験を振り返り言語化して記録し、自分自身の中に組み込んでいく必要があると考えられる。コツは指導者から教えられて獲得するものではなく、自分からつかみに行かなくてはならない。したがって、指導者はクラブの正しい動きを理解すること、運動者が自分自身でコツを発見できるように体感や経験に意識を向けさせるよう働きかけを行うことが必要であろう(例えば、フィードバックを与える、練習日誌を付けさせる、など)。また運動者は、指導者のフィードバックを全て鵜呑みにしたり(特に指導者の感覚表現などの場合)、動画による見た目の動きだけに着目したりせず、自分自身の感覚にも意識を向ける必要がある。

これらは大学における授業でも実施可能である。例えば筆者自身の授業では、学生同士で動画を撮影し合い動きや感覚についてディスカッションを行わせたり、毎回の授業後に振り返り課題を課したりなどを行っている。振り返り課題については自分自身のアドレスやスイングについて改善すべき点や気を付ける点などを1~2文で回答させるものであるが、今後は自分自身の感覚を言語化するような設問項目に変更していくことで、学生自身が自らコツをつかむことができるように促しているのではないかと考えている。

ゴルフにおける一人称研究の実践として、筆者自身は練習やコースラウンドの際の動画撮影と振り返り日誌を続けている。ゴルフは静止したボールをクラブで打つクローズドスキル系のスポーツであり、また、特にコースラウンドの際は風や傾斜などが毎打異なり、さまざまな環境と身体との

インタラクションの中でプレーを行うため、体感に意識を向けるからだメタ認知を実践するのにゴルフは適した題材であると考えられる。継続してデータを蓄積しているところであり、まだ分析を行っていないため報告できることはないが、今後、ゴルフにおける身体運動のコツについて何かしらの報告ができればと考えている。

<参考・引用文献>

- 田中彰吾. 運動学習におけるコツと身体図式の機能. バイオメカニズム学会誌. 37 巻 4 号, 205-210, 2013.
- 吉川政夫. 運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ. バイオメカニズム学会誌. 37 巻 4 号, 215-220, 2013.
- 諏訪正樹. 身体知という研究領域. 人工知能. 32 巻 2 号, 215-217, 2017a.
- 諏訪正樹. 身体知獲得のツールとしてのメタ認知的言語化. 人工知能学会誌. 20 巻 5 号, 525-532, 2005.
- 諏訪正樹. 一人称研究の実践と理論. 近代科学社. 東京. 2022.
- 澤野大地, 森丘保典, 小山裕三. 陸上競技男子棒高跳における中・長期的なトレーニングの推移: 準備期のトレーニング内容および方法の変化に注目して. スポーツ科学研究, 第 3 集, 19-29, 2019.
- 松本協. ゴルフの力学. 三栄. 東京. 2020.
- 三觜喜一. 誰も知らなかったゴルフの教科書. 扶桑社. 東京. 2022.

ゴルフ指導を考える ～習熟と修正の関係～

佐伯聡史 (富山大学)

私は常々、ゴルフのショットにおけるスイングは、「お箸の使い方」や、「体操競技の技」とその意味的構造は同じであると考えています。その理由は、

- ① 変則的なフォームでも良い結果が出ることがある
- ② 変則的なフォームでも練習を重ねれば良い結果も出るし、ミスも減らせる
- ③ 何十年も変則的なフォームでいると、良いフォームが心地悪い
- ④ 変則的なフォームで長期にわたって練習を重ねていなければ修正は比較的容易
- ⑤ 変則的なフォームで長期にわたって練習を重ねていると修正は困難
- ⑥ 良いフォームの方がミスは少ない
- ⑦ 良いフォームでもミスは出る
- ⑧ 良いフォームだからといって、練習しなければミスは頻発する
- ⑨ 短期でも練習すれば結果に結びつきやすい

お箸については、一般的な日本人であれば、毎日使う、すなわち毎日トレーニングをしている状況ということです。小さい頃に、正しい持ち方を覚えて大人になった人は当然お箸を上手に使いこなすことができるわけですが、正しくない（変則的な）持ち方（フォーム）で毎日食事をした人であっても、大人になるまでその変則的なフォームを継続していたことで、変則的ではあるもののしっかりとそのフォームが身につき、そうそうミスすることはありません。また、これは私が高校生の時に体験した実話ですが、変則的なフォームが身についた状態だった私は、高校の体操部の顧問に、合宿の際にそれを指摘され、強制的に直すことになりました。毎日全身筋肉痛になるほどの練習をした後、早く食事を済ませて休みたかったのですが、毎食監督の目の前に座らされ、監視されながら矯正しました。当然修正中はミスが出現するため、食事のスピードは遅くなり、居残りで食事をしていました。この時は、疲れているのだから、合宿中でなくてもいいじゃないかと思ったのですが、1週間の合宿終了時には、集中的に矯正したおかげでお箸を正しいフォームで使いこなせるようになり、食事の時間も短縮しました（今では大変感謝しています（笑））。

この出来事は、ゴルフのショットの習得によく似ていると考えています。ゴルフを覚え始めるときに、自己流でスイングを構築した場合というのが、私自身の自己流のお箸の持ち方ということになります。その後、まだスウィングが固まらないうちに（お箸の持ち方を幼児期に）修正することは、それほど難しいことはありません。しかし、大人になるまで自己流のフォームで習熟してしまった場合、その修正はなかなか骨の折れる作業になります。私がお箸の持ち方を修正されたときは、「将来恥ずかしいから今直せ」と監督が強制的に修正をしたので、私の意思は介入する余地がありませんでした。しかしゴルフスウィングの場合、例えばその瞬間に調子が良くて、今この状態を維持したいという気持ちであれば、スウィングの修正はなかなか受け入れられないでしょう。また、今は調子が悪いのだけれど、来月のコンペまでになんとか調子を上げたいなどの短期的な理由も同様です。しかしゴルフは生涯スポーツであり、多くの場合、高齢になってもプレーを続けることができます。将来的に（人によって何年後をイメージするかは異なりますが）良いスコアで回り続けたいという希望があるのであれば、どこかのタイミングで中長期的な視野に立って大幅なスイング修正が必要になってきます。

大学の授業では、クラブを握ったことが全く無い初心者から、大学生になってから友人と数回練習場に行ってみた経験のみの者、数年以上前に誰かに教えてもらったことがある者、そして、幼少期に指導者にきちんと習って習得したものまで、様々な習得状況の学生がいます。指導者としては、一定の限られた時間の中で受講者全員をある程度上達させねばならないというミッションがあります。そしてこの学生達は、将来ゴルフにどのように向き合っていく気持ちがあるのかということも重要です。将来、生涯にわたって嗜みたいと考える学生は、すぐに結果は出なくてもコツコツと指導することが可能だと思いますが、とりあえずやってみたい、試しにやってみたいという動機で

参加した学生には、ある程度即効的に効果が出るような指導をしながら、ゴルフへの興味が覚めな
いような気づきが必要です。

初心者に何からどのように教えるかということは、世の中にはマニュアルというものが存在しま
すので、割と対応しやすいものです。しかし、中途半端に経験がある者の指導は個人によって状況
はまちまちであるし、毎回異なるスイングになったり、急にボールに当たらなくなったり、急に真
っすぐ飛び出すなんてことも起こるため、困難を極めます。

私なりに、この部分から指導すればある程度上手くいくという、経験則に基づく確信はあります。
この辺りは、私が長年経験してきた体操競技の技の習得や、指導場面に置き換えると非常にわかり
やすいです。しかし今回は紙面の都合で述べられませんが、機会があればまた次回述べたいと思
います。

ゴルフ雑感

江口潤（産業能率大学）

はじめに

全国大学ゴルフ指導者研究会副会長より、研究会会誌への投稿を依頼された。テーマは「ゴルフ指導を考える」、あるいは、「ゴルフ授業の意義」とのこと。私は、大学の授業でゴルフを担当して約 30 年になる。この機会に、自身の経験を振り返り、ゴルフ指導について、教材としてゴルフを実施する意義について、個人的に思うことをまとめ、研究会の今後に期待することを最後に述べてみようと思う。

自身の振り返り

1980 年代の終わりに、本務校にゴルフの愛好者である W 先生が赴任された。本務校には W 先生がゴルフの授業を導入され、私はその助手としてゴルフの授業に関わることになった。それ以前は、ゴルフをする機会はなく、道具もなく、関心もなかった。本務校のゴルフの授業は、シーズンスポーツ科目として、宿泊を伴い避暑地にて実施された。長野県北竜湖畔の某大学の宿泊施設での実習であった。施設には用具が一式整えられていて、6 ホールのショートコースとパター練習場があった。履修学生は 20 名ほどで、当時は履修学生と技量を競い合う程度の腕前であった。しばらくは、年に 1 回この授業が私とゴルフの接点であった。1990 年代の初め、非常に個人的な話であるが、世帯を持ち連れ合いの父親がゴルフ愛好者で、その父からクラブ一式を頂いた。手元に道具が揃ったのである。練習場に行くことが多くなったのはこのころである。1996～97 年にオハイオ州立大学（OSU）に在外研究員として 1 年米国で過ごした。OSU はゴルフコースを持ち、在外研究員の立場で、12 ドルほどでラウンドできた。時間があると、一人で出かけた。同伴競技者がいるわけではなく、後続がない限り、ボールをいくつも使って遊んでいた。本務校復帰後のゴルフの授業は、半期週 1 回の授業とシーズンスポーツの 2 形態となり、後者は山梨県のショートコースを使用するようになった。ショートコースとは言え、18 ホールの本格的なものであり、ある程度の技量が指導者にも求められるものとなっていった。これに伴い、日ごろから練習場に通うようになった。また、他大学の先生方との交流ゴルフコンペにも積極的に参加するようになった。ゴルフ授業に参加する学生の中には、高校時代にゴルフ部に所属していた強者も履修するようになった。彼らを見るに改めて、幼少からの経験が大きな差を生むことを実感させられた。私は大学を出るまで、ほぼ一つのスポーツに執着してきた。奉職以降、いまだにその傾向は温存しているのだが、諸先輩から「大学教員はスポーツのデパートでなければならない」と助言を受け、その教えから今の自分があるように感じている。スキーもテニスもバドミントンも卓球も、それなりに指導力を研鑽してきた。ゴルフも然りである。しかし、あくまで私のゴルフは我流である。182 cm、80 kg という体格から、比較的球は飛ぶのだが、安定感がない。セカンドショットは、トップしたり、駄振ったりして、足場の傾斜に戸惑い、対応したスイングができない。グリーン上では、傾斜やマウンドや芝の強弱が正確に把握できず、スイング自体も安定性がない。調子が良いときは 80 台、平均して 90 台が現状の技量である。

ゴルフ指導について

このような立場で、ゴルフの授業をどのようにマネジメントすべきか、よく考える。ゴルフの歴史や競技規則の説明、マナーやエチケットの重要性、暑熱下における運動、自然環境の変化に対する対応（ゴルフ場での落雷事例）などの講義はある程度可能であろう。スポーツ文化論を織り交ぜながら講義を進めていく。技術に関する実際の指導は、以下のような内容になる。初心者には、教室にてパターマットを利用したパター練習から実技に入る。カーペットの教室で床に球を置いて打ってみる。早い芝に見立てて、ターゲットの 30 cm 以内に球を止める課題を与えると、やみくもに打つのではなく、力の加減を必要とすることを理解する。10 円玉を 2 枚重ねて、上の 1 枚だけ打つ練習をしてみる。パターは、そのくらい微妙であると伝えている。次に、グラウンドに出て、プラスチック穴あき球を 9 番アイアンで打たせてみる。下半身で作る土台を安定させて、体幹を捻転す

る動きを理解させ、球を打たせる。クラブをどう持つかも、幾種類かを説明し、自分の感触で選ばせる。野球やテニスの経験者は、道具を振るという動作を理解しているせいか、比較的始めから球を捉える。運動経験のない学生は、棒立ちの姿勢で手の動きだけで球を打とうとする。課題のひとつ目は、後者の学生の指導法である。アドレス、テイクバック、トップ、ダウンスイング、インパクト、フォロースルー、フニッシュの局面を意識させ、自身のスイングにはどのような特徴があるか、スマホを活用して動画や静止画を取り自身で分析しレポートさせるなどして現状の把握を促す。適度な前傾姿勢でスイングを始動し完結するための体幹の強さが不足している学生が多数である。ある程度打てるようになれば、次に、ふり幅の意識とクラブの違いについて説明し、特にショートアイアンで、距離打ちを取り組ませる。40ヤードから100ヤードまで10ヤード刻みでコントロールして打つことを練習させる。本務校の授業は、1日目は練習場での実球打ち、2日目、3日目はショートコースでラウンドの手順を理解し、そのうえで2泊3日の合宿形式を実施している。どんな初心者でも、2日目のショートコースラウンドの経験で、スロー・プレーではあるがラウンドをし終えてくる。ここからは、ファスト・プレーの徹底と、ロングアイアンやユーティリティー、ウッドの練習が加わる。おおよそ100ヤードから250ヤードの距離の打撃が二つ目の課題になる。3日目のショートラウンドの前の打撃練習で、5番ユーティリティーと7番アイアンを打たせる。ユーティリティーやウッドは、クラブのしなりをアイアンよりも感じられる。しなり返りにうまく球を乗せるイメージで打たせてみる。手打ちよりも体幹を使ったボディースイングを理解させ行わせる。イメージと出球の不一致は回数をこなすことにより徐々に修正されていくものと考えている。コツをつかむと球を勢いよく飛びだす体験をする。腕力に自信があるものは、芯を食った球が勢いよく飛び出していくことに快感を持つ。それを体験できると意欲は倍増する。女子や腕力に自信がない、あまり運動経験がない男子は、ここから時間がかかる。授業では時間が確保できないので、視点を変える。ティーショットは、前に飛ばせばよい。そのあとのアイアンとアプローチ、パッティングに興味を移してあげるとやる気も取り戻せる。特に、パッティングは奥深いプレーであり、興味を持たせやすい。学生は、ショートコースのラウンドで、ティーショットは苦手でもパッティングがうまくいって自信がでたり、たまたまナイスショットが2回続いて笑顔になったり、何気ない成功体験を持つことが重要と考える。長年取り組んではいるが、継続していないのでなかなか技術は向上しない。自身が経験しているので学生にもそれは伝える。プロは1日8時間何千発も球を打つ。それでも思う通りに球は飛ばないのだと。コロナ禍で2020年度から3年間というもの、宿泊を伴う実習はできなかった。2023年度やっと2泊3日で実習を再開する。23年度は8人の学生が参加した。実習場所は栃木県的那須野が原カントリークラブである。言わずと知れた学生ゴルファーの聖地である。ここでの実習は少しハードだ。初日こそ午後3時間ほどの打撃練習とパター練習で終了するが、2日目3日目は早朝5時起床6時から2時間担ぎのラウンドを行い、食後午前ハーフ、午後ハーフを2日間繰り返す。体力的にも、技術的にも本当に成長する3日間である。夏季休業中に行うシーズンスポーツ科目としての位置づけであり、8月の炎天下での実習となる。暑熱対策は履修者自身も知識を持ち、些細な異変を早々に察知して、早め早めの対応を心掛けさせる。こまめな飲水は必須であるが、氷嚢などの準備も怠らないように。夏季の場合、雨天時の雷雨対策も知識として重要だ。雷雲が見えたら即プレー中断、急いでクラブハウスに戻るか、途中の東屋に避難する。見当たらなければ、大きな木の根からすこし(4m程度)離れたところにしゃがんで待機する。日常の教室の授業に比べ、学外での宿泊を伴う実習には、学生は興奮気味だ。過剰にならないように配慮しつつ、楽しい時間を提供することが最も成果を上げる骨である。生活時間の厳守が達成できていれば、多くのことには目をつむる。私は、学生がシーズンスポーツのゴルフに授業を終えた時に、いずれまたゴルフを試してみよう、と思わせる授業を心掛けている。

教材としてゴルフを実施する意義

ゴルフは、紀元前1世紀にローマ人が興じたパガニカ、14世紀にはイングランドでカンブカ、オランダでコルベン、フランダース地方でフランス人がショールなど、棒で球を打つ遊びがあったそうだが、今日、ゴルフはパガニカをルーツにスコットランドで育て上げられたスコットランド生まれの球技であるというのが通説である。この紳士のスポーツと呼ばれるゴルフの世界の英雄であるボビージョーンズが著書「ゴルフの基本」の中でいくつかの原則を述べている。ゴルフでの原則であるが、敷衍して人生の原則(人が学ぶ)にも通用する事柄ではないかと思う。ボビージョーンズの言う原則のその1は、決意の原則である。「打ち方の末節について多くを語り、考え、書きすぎ

る、最も大事なことは、球をヒットすること、初心者はクラブを正しい姿勢で球に当てることを、強い決意を持って臨むべきだ」と。その2は、くつろぎの原則である。「アドレスの姿勢の要点は、落ち着き快適、くつろぎにある」と。その3は、単純化の原則である。「良いフォームの神髄は単純化にある。単純さは誤謬や扶養の動作を除くことで得られる」と。その4は、順序的統合の原則である。「どんな動作でも限界とか力を規定できないし企てもできない。動作の正しい順序を伝えることが課題だ」と。その5は、明確化の原則である。「アドレスで、プレーヤーの胸中に、ヒットしようとするための方法と方向の明確な構図が描かれてなくてはならない」と。これらの原則は、人が「学ぶ」という行動を進めていく際にとっても有効な原則でもある。教材としてゴルフを実施する意義は、ゴルフという球技が多様な価値を内包している事実、それに一端でも触れることで、実に多くの学びがあることを指摘することができると思う。

指導者研究会の今後について

最後に、全国大学ゴルフ指導者研究会への今後の期待について書いてみよう。私はこの研究会に入会して9年目になる。諸先輩方が徐々に教職を引退し、研究会からも離れていかれる。名目では名誉会員となる。現在の研究会の課題は、若い先生方の入会促進だ。しかしそもそも、大学体育教員の若手の絶対数が減少してはいないか。正確な数字を把握できていないがそれが実感だ。すそ野を広げるために、高校・中学の教員にも枠を広げて、全国学校ゴルフ指導者研究会としてはどうか。また、事業面での提案としては、海外ゴルフ場視察研修を是非実現してほしい。ゴルフの発祥地であるスコットランド地方、例えば、セントアンドリュースでのプレー研修や歴史探訪などを熱望している。

結び

海の向こうで全米女子オープンが開催された。今日（日本時間7月10日早朝）が最終日で、畑岡奈紗選手や古江彩佳選手が活躍した。昔、樋口久子選手や岡本綾子選手が活躍した。続いて宮里藍選手が活躍した。今活躍している日本の女子選手たちは、宮里藍選手の活躍を見て育ったという。これから10年後、2030年代は畑岡選手や古江選手の活躍を見て育った選手たちが活躍するだろう。その頃、私は誰とゴルフをプレーしているのだろうか。

研究会の発展に向けて、今求められていることは何か

中島弘毅（松本大学）

上記のテーマで執筆依頼を頂いた。「理事長として、本研究会のこれからについてどの様に考えているのか、その想いを開陳しなさい」との副会長からのお達しである。カントは、「我々は何を知りうるか」「我々は何をなしうるか」「我々は何を欲しうるか」と問うている。これを借用し、以下の三つの観点から考えてみた。1. 本研究会は何のために存在するのかについて。2つめとして、我々は何をなしうるかとして、何をすべきかを考えた。3つめとして、会員は、何を求めているのか。我々は、どう有りたいたかについて考えた。

まずは、本研究会は、何のために存在するのかについてであるが、これは、以下の1) 何のために存在するのか、2) 何をしてきたのか、3) 何を知ることができるのかの観点から考える。まず、1) 何のために存在するのかについてである。何のための前に、誰のために存在するのかについて確認をしておきたい。それは、会員であり、主として大学の体育の授業においてゴルフを担当している、または、ゴルフを担当しようとしている教員の為に存在していることに間違いはないと思われる。次に本研究会の存在意義について考える。それは、主に以下の3つに凝縮することが出来る。①大学体育におけるゴルフ授業担当教員が必要とするゴルフ種目の指導技術及び知識の向上に寄与すること、②授業展開に必要な環境づくりをすること、③「ゴルフ」授業を通して、学生の教養を高め、真理を探求する思考を養うことに寄与するあらゆる関係事項について、議論、研究する場の提供である。②の環境づくりには、大学体育の存在意義を説明することと同様に、そこで行う種目についての実施意義についても説明することも含まれる。すなわち、大学体育におけるゴルフ種目の教育的価値を確認する、または、共有する場の存在としての意義も有する。2) 何をしてきたのかの視点から、次に本研究会では、どの様なことを実施してきたのかを概観してみたい。それは、以下の8つの事項にまとめることができる。①ゴルフ技術の修得（指導技術の修得、指導者の技術の修得）。これは、指導者を招いての研修、および会員相互の発表、討議によって実施してきた。②ゴルフに関係する諸知識の修得。これは、主として座学における講義によって行われた。③ゴルフ指導テキストの発刊、研究会誌の発刊。本研究会では、授業用にこれまでゴルフ指導者テキストを作成し、また、活動記録および会員の日ごろの研究成果発表の場として、研究会誌を発刊してきた。④ゴルフ授業の展開方法の共有。これは、会員相互の事例発表で行われた。⑤「公認指導者認定制度」事業の実施。⑥各大学におけるゴルフ授業取り組みに関する調査研究。⑦実習場所の紹介等の情報提供。⑧他大学との教員を中心としたゴルフ授業に寄与する各方面の人々との人的交流などである。次に、3) 何を知りうるのかであるが、本研究会での活動を通して、上記に記した8項目（①ゴルフ技術の修得、②ゴルフに関係する諸知識の修得、③ゴルフ指導テキストおよび研究会誌の発刊、④ゴルフ授業の展開方法の共有、⑤指導者認定制度、⑥各大学におけるゴルフ授業取り組みに関する調査研究、⑦実習場所の紹介等の情報提供、⑧他大学教員等との人的交流）について我々は、情報を得ることができる。

次に、2. 「我々は何をなしうるか」として、我々研究会が、上記8項目をさらに充実、発展させるために、何をすべきかということを考えている。既に本研究会会誌の第10号には今までの会長らによって、今後に向けて何をしておくことが求められるかが提起されている。大澤前会長は、事業・活動記録の蓄積に加えて、さらに「研究報告の充実」「多様な情報提供」「提言・提案の発信」を提示している。また、西藤元会長は、これまでの課題を歴史的に振り返り、見直すことを提案し、三幣元会長は、将来的には研究論文の査読制度を目指すこと、ゴルフ授業の充実と発展によるゴルフ人口拡大への寄与、さらには、ジュニアのゴルフ愛好者に対する育成方策を練習場やゴルフ場の経営者に直接啓蒙することなどについて具体的に提案している。松田元副会長は、資金調達方法の検討に加え、研修理念、内容を再検討し、「ゴルフとは何か」「ゴルフで何を教育するのか」「知識や技術が究極、個人や社会にどのような役割・機能を果たすことができるのか」など、「理念や思想を持つこと」の重要性を強調し、研修会の存在意義を改めて問い直すことを提起している。

我々は、これら諸先輩からの提言を真摯に受け止め、8項目についてアップデートおよびアップグレードを測りながら、上記提言を如何に実行に移してゆくかが求められている。その為には、今

まで以上に会員諸氏が持つそれぞれの貴重な能力を上記事項実現に向けて生かせる組織体制を構築することが重要である。

本研究会は、多くの組織と同様、理事会が研究会の事業内容を検討し、運営をしている。理事会は、年に2回開催され、年に一回開催されている宿泊型の研修会の開催を中心に議論し、研究会誌の発行を含めた年間の事業予定および予算の執行状況の確認をしている。加えて、その時々提案された議題について討議し、研究会の活動の活性化に向けて議論してきた。

その実務的作業の役割分担は、どの様になっているだろうか。会の実務的作業は専務理事として事務局長が担い、会長、副会長、理事長らと相談しながら理事会および総会に向けて様々な作業を執り行っている。研究会誌については、副会長が慣例として編集長となり、研究会誌の編集から送付までの一切を執り行い、事務局長らが編集委員として必要に応じて作業を担っている。本研究会の中心的活動である定例の宿泊型研修会の開催については、多くの場合は、その時々で研修会場となるゴルフ場とつながりがある役員および会員が交渉役を担い、担当幹事として、理事各位の協力を頂きながら運営をしてきた。時には、事務局がゴルフ場に連絡、依頼をしてきたこともある。以上が本研究会における主な役割分担であるが、上記以外の事項においては、その都度、理事のご協力を頂きながら、助け合いの精神でこれまで運営を担ってきた。

今後、今までに実行してきた8事項のさらなる充実、発展、また諸先輩の提言を実行して行くためには、どうしたら良いのだろうか。その為には、役割分担を明確化し、役員全員でその実務を担ってゆくことが求められるのではないだろうか。例えば、編集委員会、研修委員会、調査・研究委員会、広報委員会、総務委員会などの委員会を設置し、理事および会員を配置し、それぞれの委員会では、委員長が中心となって、委員と共にその委員会の業務を遂行することが考えられる。では、それぞれの委員会の具体的な役割は、何だろうか。編集委員会は、③ゴルフ指導テキストおよび研究会誌の編集・発刊について、研修委員会は、①ゴルフ技術の修得および②ゴルフに関する諸知識の修得、④ゴルフ授業の展開方法の共有、⑤指導者認定制度などの研修会の開催事項について、調査・研究委員会は、⑥ゴルフ授業等に関する調査研究ならびに提言・提案事項等について、広報委員会は、HPの更新、広告等の広報事業について、総務委員会は、⑦実習場所の紹介等の情報提供、⑧他大学教員等との人的交流等の渉外、年間予算・事業関係の資料の作成、資金調達等について管轄するなどが考えられる。この様にして、会員全員で実務を分担し合い、役割を明確化し、会員の持つ能力を活用する場づくり、組織作りが必要であると思われる。

最後に、3. 我々は、そして会員は、何を求めているのか、どう有りたいのかという事項について、「我々は何を欲しうるか」について考えてみたい。松田元副会長は、研修会において「受講者に最善の技術、知識が適切・効果的に提供されることが重要である」とし、当然のこととして、「教育現場あるいは個人の能力向上に直接役立つ」ことが重要であり、時間、費用、労力を費やして受講しに来る参加者に満足感が得られることが、参加者のリピート率の向上につながり、ひいては参加者の増大と研究会の発展につながるとしている。

運動実施者が運動を継続するためには、研究会に参加することによって、①できた、分かったと感じる有能感、②活動そのものから得られる楽しさと他者との交流から得られる楽しさ、③本活動が会員にとってどの様に自らのねらい達成に貢献し、会員自身が満足感を得たか、また為になったと感じる様な学習成果が得られたかへの認識、そして④次回への期待感が大切だと言われている。本研究会では、研修会の後に研修会のさらなる充実を目指して、毎回アンケートを実施している。そこで、第26回研修会の振り返りアンケート結果を上記4つの事項に照らし合わせて見た。

①の有能感については、「数日間で集中的に講習するため、前日の学びが残った状態で次日に復習・発展ができ、集中講習の良さを感じた」「プロギアの方の講演では難しい話ながらも、クラブヘッドの少しの構造によっても違いがあり、距離、弾道、ミート率が変わることを再確認した」などの肯定的な意見が寄せられていた。また、「講習では、自分自身のスキルアップに必死になると同時に、初めて運動に向かう学習者の立場を身をもって体感することができ、スポーツ分野に携わる大学教員としても勉強になった」とする学生に有能感を与える指導の重要性と難しさを指摘したコメントも見られた。

②活動と交流から得られる楽しさでは、「初心者で無謀にも参加した私を温かく迎えてくださり誠にありがとうございました。プロのご指導はとても分かりやすく、また夜の講義も大変勉強になりました。参加された皆様からも多くのお声がけとご指導をいただき、各先生の言葉がけや指導法等も含めて勉強になりました。(中略)誠にありがとうございました。」「部外者の私でしたが、沢山

の立派な先生方と色々な話ができ、とても充実した楽しい3日間でした。」「自身のスキルアップに繋がったと同時に、他大学の先生方と情報共有ができた。」などの本研究会の良い雰囲気が現れており、活動における充実感と良いコミュニケーションが行われ、他者受容感が十分に得られていることが見て取れる。また、「距離は長くないが戦略性があって難しく、コース経験の少ない方には非常に大変だったと思う。特に、グリーンはアンジュレーションが強く3パット以上も続出なので、少し速さを落としても良いと思う。しかし、経験豊富な方にはコースマネジメント力が試される絶好のコースだと思う。」などの「自然」を相手にするスポーツとしての困難性から生ずる指摘もあった。

③ねらい達成に対する満足感と「ため」になったと感じる学習成果への認識については、「実技・講義と充実した内容で、理論と実践を関連付けて学ぶことができた」など、実技および講義に対して、殆どが大変有意義であったとの良い評価が寄せられていた。他には、「プロゴルファーの指導はもちろんよかったが、個人的にはなかなか聞くことのできないメーカーの方のお話が聞けたことが非常に有意義であった。(中略) 直接お話したことで得られた貴重な情報も多くあった。私は理工系の学部勤務しているので、そういった技術的な話を授業に取り入れ学生たちがゴルフをより身近に感じられるような工夫を行いたい」などの感想が寄せられていた。しかしながら、アンケートからは、幾つかの改善点に対する指摘もあり、また、読み取ることもできた。例えば、「実技研修のプロの指導は、レッスンやアドバイスというよりも競技(技術)目線の内容であったので、初心者や個人のスイングをどのように評価・修正するかというより、技術的・戦術的な指導が多かったように思う」とプロの指導に対して「新鮮な感じを受けた」としながらも期待とのズレを吐露している。また、「全体的には例年とほぼ同じ内容であったが、プロによる実技研修、メーカーによる用具講義は斬新で良かった」との意見からは、内容の新規性への期待を読み取ることができる。なお、この3月の研修会では、トラックマンを用いてプロによる個別指導がなされた。「講義において質疑応答が白熱したため、設定時間をもう少し長く設けても良いと感じた」「せっかくプロに来ていただきたなら、各自の動画を撮影して、反省会がてら一人ずつ映像で解析してもらいたいのも楽しく、また、次の日のラウンドに役立つのではないかと」の意見も寄せられた。これらの貴重な意見を如何に次の研修会に反映させていくか、その一つ一つの地道な取り組みが求められている。

④次回への期待感については、「また、機会があれば参加させていただけると嬉しい」「今後もメーカーの方とお話ができるとよい(今回はドライバーが中心だったので、アイアンやパターについて聞いてみたい)」「運営は大変になるが、もう1日長くてもよい。(現状でももちろん満足です)」など見られた。なお早速、この3月の研修会では4日間の研修日程が組まれた。このような次回に対する期待感がリピート率の向上につながることは言うまでもないであろう。

研修全体に対しても、「コロナ禍で開催が危ぶまれた研修会であったが、無事に終わっただけでなく非常に有意義であったと思う。コース・宿舍・食事などのハード面が素晴らしいだけでなく、日課日程・研修内容・運営といったソフト面においても改善と工夫がなされ充実していたと思う」などの様な良い評価が寄せられている。しかしながら、幾つかの改善への指摘、あまり表に出てこない改善への期待感などをしっかりと読み取り、今までの研修会の様に常に新規性を加える努力を継続して行くことが、参加者に「あの研修会、とても良いよ」と仲間を連れて来てもらえるようになるのかもしれない。

その為にもどうしたら良いかを皆で考え、実践して行くために「組織化」をさらに充実させ、役割分担してゆくことによって、会員の有する力を更に生かして行くことができ、会の更なる発展につなげることができるのではないかとと思われる。さらには、女性会員を増やすと共に、全国から多くの会員を獲得し、以前の様に関東を中心としながらも全国各地で持ち回りで研修会を開催できたらと願う。また、海外での研修も開催できると嬉しい。

以上をまとめると、これまで先輩諸氏が研究会の土台を形作ってくれたこと。今後は、この土台の上に質をより高めるために会員諸氏の能力をより活用する組織づくりをすること。その組織づくりの一步として、委員会を設置し、役割分担を明確化し、会員諸氏の力が発揮しやすい体制づくりが現在必要とされていることなのではないかと思われる。

IV. 令和4年度全国大学ゴルフ指導者研究会 第27回指導者研修会報告



1. 開催要項、日課・日程、参加費用、公認指導者認定実施要項

1. 目的：大学におけるゴルフ教育の充実と発展に寄与するため、研修会を開催しゴルフ技術、理論、指導法について研究討議を行い、技術力と指導力の向上を図る。

2. 主催、後援：全国大学ゴルフ指導者研究会主催、全国大学体育連合後援

3. 期間、会場、参加人数：

期間：2023年3月8日（水）～3月11日（土）（3泊4日間）

会場：那須小川ゴルフクラブ <https://www.nasuogawagc.co.jp/>

〒324-0502 栃木県那須郡那珂川町三輪1283 TEL：0287-96-2121

宿舎：那須小川ゴルフクラブ宿舎宿泊

参加人数：12名（会員10名、非会員2名）

4. 研修内容：

1) 講義研修： 講師：前田総太郎プロ

「ゴルフスイング理論とゴルフクラブの選び方」

2) 実技研修： 講師：前田総太郎プロ

「初心者に対する指導法」「レベルアップ練習とショート・ゲーム技術研修」

「課題別・状況別実戦研修（バンカー、アプローチ、グリーン）」

「トラックマン4による個別特性とアドバイス」

「コースでの実戦研修による総合技術の向上とコース・マネジメント」

5. 研修会費用：参加費：会員 5,000 円、非会員 7,000 円、ゴルフ場使用料：44,880 円

6. 研修会概要：

1日目：午前：コース・マネジメント研修

午後：打撃練習場における「初心者に対する指導法」「レベルアップ練習とショート・ゲーム技術研修」「トラックマン4による個別特性とアドバイス」
練習ホール3ホールにて、実践的な指導について（様々なライへの対応）

夜：情報交換

2日目：午前：コース・マネジメント研修

午後：「課題別・状況別実戦研修（バンカー、アプローチ、グリーン）」

夜：講義研修「ゴルフスイング理論とゴルフクラブの選び方」

3日目：午前・午後：プロによるラウンドレッスン

コースでの実戦研修による総合技術の向上とコース・マネジメント」
（レベルアップ講習）

夜：2022年度全国大学ゴルフ指導者研究会総会

4日目：総合練習（コンペ形式）

7. 総括：天気に恵まれ、朝6時からの練習が可能であり、レベルアップ研修としては十分な時間が確保できた。また、指導法としては、とてもシンプルで学生に混乱させない方法を前田プロから教授頂き、各指導者にとって学生への指導法として得るものが多い研修会となった。



2022年度全国大学ゴルフ指導者研究会第27回研修会日程

2023年	3月8日 水曜日	3月9日 木曜日	3月10日 金曜日	3月11日 土曜日
7:00		個別練習	個別練習	個別練習
7:30		朝食	朝食	朝食
8:00		コースマネジメント 研究2 (9H)	ラウンド レッスン (18H)	総合練習
8:30				
9:00				
9:30	受付			
10:00	コースマネジメント 研究1 (18H)	個別練習		
10:30				
11:00				
11:30				
12:00				
12:30				
13:00		初心者指導法		
13:30				閉校式
14:00		トラックマンによる スイング測定	修正練習	解散
14:30		グリーン周り指導法	トラックマンによる スイング測定	
15:00	打撃練習			
15:30	アプローチ練習			
16:00	トラックマンによる スイング測定			
16:30				
17:00	開講式	個別練習	個別練習	
17:30				
18:00	夕食	夕食	夕食	
18:30				
19:00		理論講義	研究会総会	
19:30	テーマ別ミー ティング	スイング理論		
20:00		道具について	各大学報告	
20:30				
21:00	終了	終了		
21:30				
22:00	就寝	就寝	就寝	

	プロ指導枠
	研究会プログラム
	会員相互検討会

2. 実技研修会、前田プロによるレッスン

パター: ラウンド前の練習では、登りのパターをきっちり打てるように練習して感覚をつかんでおくことが重要である。届かなければ入らない。

アプローチ: パターも同じだが、構えからテイクバックの速度の2倍の速度で打つことがポイント。つまり、構えからテイクバックまで1で引いたら、1でフォロースルーまで振ると、結果2倍の速度でボールに当たることになる。(図1) アプローチとパターで一番注意すべきことは、緩むことである。緩むことでダフリやトップのようなミスが出ることから、ミスの確立を減らすことにつながる。

アイアンとドライバー: スタンスは、器具を用いて、両内転筋を緊張させた脚ポジションを取らされた。下半身を安定させることは、慣れるまでとても窮屈で、動きが取れない状態を作る。土台のしっかりしたフォームを作ることで、クラブが遠心力の中心線を追い越しやすい下半身ができる。

方向性を重視したスイングプレーンに乗せるクラブの動きは、感覚的にアウトサイド→アウトサイドである。

体とクラブの相対的な関係は、グリップエンドは常におなかを指すが、ヘッドはテイクバック時には、体から外方へ離れ、インパクトで体に一番近いところを通り、フォロースルーは体から外方へ離れていくイメージにすることで、ヘッドの直進性の軌道が長くとることができる。インサイドイン、インサイドアウトなど、テイクバックでインに引いている人には、テイクバック時に初めは腕を体の外に開くようでとても違和感を感じる。

一般的に体の向きより後方にクラブを引く人が多いが、ヘッドが遅れる原因になる。体の向きの正面より後方にクラブを引きたい人は、体が回り切ったら、後方ではなく上方へクラブを上げ、上からクラブが落ちてくる重力に合わせて腕をおろし、体を回すことで無理のないスイングが可能となる。

今年初めてトラックマンを導入し、実際に打った感覚を客観的な数値で確認することができた。クラブパス、アタックアングル、スピン量など感覚と客観的な数値を同期させることができた。

3. 講義報告

3月9日 19時 夜の講義 前田 総太郎プロ

【略歴】

経歴：私立鎌倉学園高等学校卒業、サンディエゴゴルフアカデミー卒業、日本ウエルネススポーツ専門学校AT科卒業、東北福祉大学女子ソフトボール部トレーナー、キャロウェイゴルフ株式会社マーケティング部。現在：芝浦工業大学非常勤講師、日本プロゴルフ協会ティーチングプロB級、スポーツコンサルティング団体代表、鎌倉プリンスホテル七里ガ浜ゴルフ場専属プロ

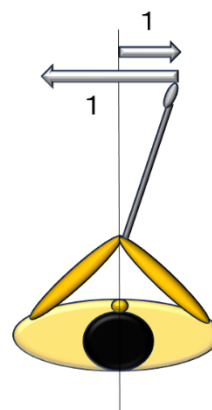


図1. テイクバック1：フォローするまで1

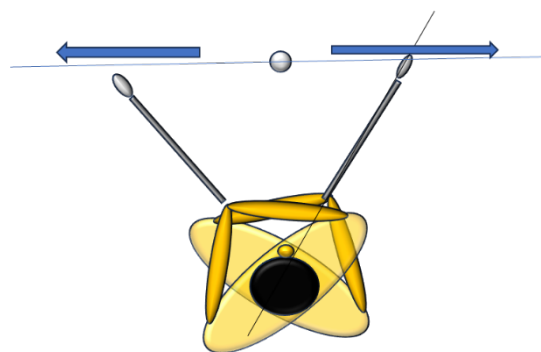


図2. 自分の位置とクラブの相対位置はアウトサイド⇒アウトサイドとなる

【講義内容】ゴルフ指導論2023

私はアメリカのミシガンに語学留学している際にホームシックになり、叔母のいるサンディエゴへ遊びに行った際に、ゴルフと出会い語学留学そっちのけで、そのままサンディエゴに住み着き、サンディエゴのゴルフアカデミーに入学した。アメリカではミニツアーまで出場していたが、怪我をしてプレーができなくなったため、レッスンを始めるようになった。レッスンを始めて分かった事はスイング以外の事について無知だということだった。レッスンに必要な要素は、ゴルフスイングのメカニズムの理解、基礎的な運動生理学や解剖学の知識、ゴルフクラブの知識、プレーやレッスンの経験であった（図1）。

ゴルフスイングのメカニズムの理解は、サンディエゴゴルフアカデミーでの座学で養い、基礎的な運動生理学や解剖学の知識は、日本ウエルネススポーツ専門学校と東北福祉大女子ソフトボール部指導での実践経験で養い、ゴルフクラブの知識は、キャロウェイゴルフ株式会社でのフィッティング業務で養い、プレーやレッスンの経験は、日頃のレッスンと過去の試合や日常でのラウンドで養った。

ゴルフスイングとは

ゴルフスイングとは、ゴルフというスポーツを行うためにゴルフクラブを持って行う動作であると言える。良いゴルフスイングとは、ボールをより「遠くまで」より「コントロール」して飛ばし、ゲームを優位に進めるための物である。また、同じように繰り返し行う事が出来るそのために体に大きな負担をかけてはいけない。

従来のゴルフ理論と呼ばれる物の問題点

理論とはイコール「法則」法則とは、一定の条件下ではどこでも必ず成立する事、それを言葉で表した物で、過去の理論と呼ばれてきた物は本当に「理論」と呼んで良いのでしょうか？ビジネス界でも良く語られますが過去の成功者の方法を真似しても必ず成功するとは限りません。でも、本当の理論なら必ず同じ結果になります。ビジネスの成功者の本は教科書ではないと言える

ゴルフスイングの考え方

すべての事柄が右へ曲がる要素か左に曲がる要素に類できる。すべてのバランスを±0にする事ができるとボールは曲がらずまっすぐ飛ぶ。その要素にはゴルフクラブも含まれる。ゴルフスイングの考え方は、右へ曲がる要素と左へ曲がる要素を±0にするための計算式をいかにシンプルにするかが重要である（図2）。また、その動きを毎日、毎回、同じ事を繰り返し行っていく事が重要となる。ボールが曲がる要素は、体の動きに求められる事であり、ヘッドの動きでしかない。同じ動作を繰り返し行える事が重要であり、基本的に動かさない部位は、体幹の回転軸となるべき脊椎（上下左右前後）股関節を除いた下半身、特に膝関節周り、グリップである。

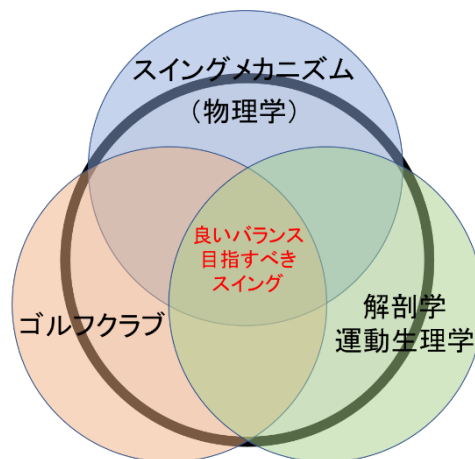


図1. スイングのイメージ

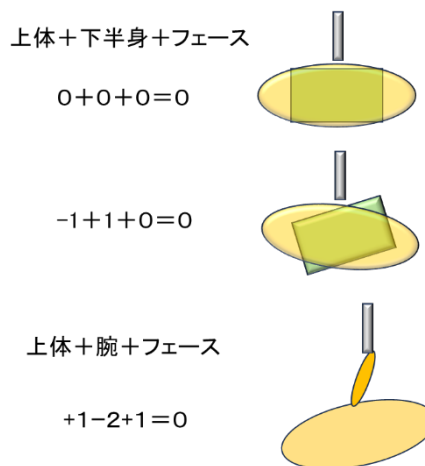


図2. それぞれパーツで帳尻を合わせているイメージ

体幹の回転軸となる骨格は脊椎であり、脊椎のブレは曲がる要素にしかない（図3）。動かすべき関節はしっかり動作させるが、動かす関節の数や可動範囲は極力減らし、下半身の可動範囲を少なくすることで安定をもたらし、上半身の可動範囲を大きくする事で捻転差が生まれ、自らのパワーの源となる。

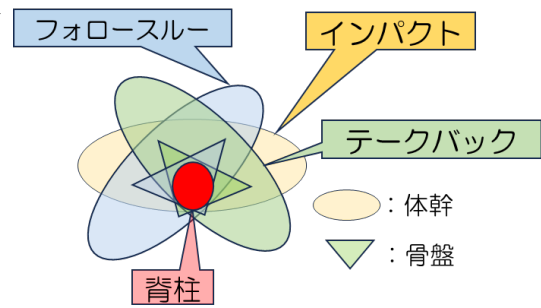


図3. 脊柱と骨盤、胸郭の位置関係

ゴルフスイングの守るべきポイント

パワーは自ら出すのではなく、重力と遠心力を最大限に利用してそれに自分の力を乗せていく。アドレスとインパクトは、腰の向きの違いだけで上半身の形は同じくなる姿勢を目指す。ヘッドのエネルギーは、振り子軸をヘッドが追い越す時に最大になるため、ボールがフェイスから離れる時には追い付いていないとエネルギー伝達効率は下がってしまう（図4）。

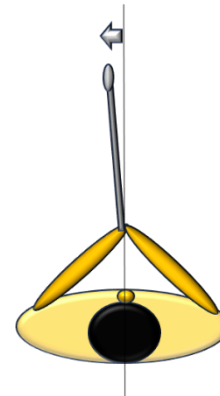


図4. 振り子軸をヘッドが追い越すイメージ

スイングプレーンは上腕骨の付け根（肩峰付近）

とボールを結んだ線が基準となる。スイングプレーン上を通るのはクラブヘッドの芯であり、ピジネスゾーンと呼ばれるインパクト前後のヘッドの移動は極力直線に近づけることで、インパクトゾーンでの直進性を確保できる。（腕を使ってインサイドに早く引き込みすぎない）

ゴルフクラブの選び方

ゴルフクラブを選ぶ上で考慮すべき点は総重量であり、重すぎるクラブはスピードが出ない。しかし、軽すぎるクラブは安定しない。個人に合うクラブ重量は十人十色であることから、他人の「感覚」からの意見は参考にならない。クラブの長さやバランス、スイングテンポの速い人にはクラブが長くなるヘッドが重くなる、大きくなる事はコントロールしにくくなる。男子プロは長さは短く、総重量は重めでヘッドの小さいクラブを選ぶ傾向だった（バランスは固定だった）。ヘッドの軽いクラブは飛ばない？

$$\text{エネルギー}E = (1/2) \times (\text{質量 } m) \times (\text{速さ } v)^2$$

質量が軽くなっても、速さが速くなると二乗されるので、エネルギー量は減るどころか増える事も多々あります。スイングテンポを左右する要素は、生活のリズムであり、要するに「性格」である。

（振りやすいクラブ）

スイングテンポの速い方は、長さは短め、ヘッド重量は軽め（重心距離＝短め）、手元の重さは重めとなる。

（上達しやすいクラブ）

ゴルフスイングの良し悪しを判断する基準は、芯を食って、思った所にまっすぐ飛ぶクラブ。この時の感覚の蓄積が上達へつながります。よって、上達しやすいクラブは、振りやすく芯が広くて当たりやすく、まっすぐ飛びやすいクラブということになる。

(初心者向きクラブ)

初心者が短期間で上達するための近道は、長さ、重さを合わせて振りやすく、芯の広く、適度な慣性モーメントの大きさのクラブである。

このような条件をクリアして繰り返し反復練習を続けていけば、自然に理にかなったスイングを修得していくことになる。

4. 令和4年度全国大学ゴルフ指導者研究会第27回研修会参加者アンケート

参加者より、以下のようなご意見をいただきました。

- ・ドライバーショットでインパクト前を大きくというアドバイスは自分では気付かない点で、大きな発見で非常に良かった。
- ・遠心力で振る合理的なスイングを見ることができ、参考になった。
- ・いつもとほぼ同じ研修項目であったが、前田プロのスイング理論、指導理論が斬新で有意義であった
- ・トラックマンによる指導、色々な人と回れたこと
- ・オンコースレッスンに不満
- ・プラス3のコースで普段練習場できないシチュエーションやライからの練習を繰り返し、行った方が有益だと思いました。
- ・フリーで周れる3コースを使って、様々なライでのウェッジ、ロングアイアン（ユーティリティ）、ヘアウェーウッドなどの打ち方講習をお願いしたいです。
- ・前田プロ自身もラウンドして一緒にプレーできた点は非常に勉強になった。
- ・次年度も前田プロに指導してもらえると継続性があってよいと思う。
- ・トラックマンを使って、客観的データに基づきプロから指導を受けるということは、この機会でないといけない研修で、自らの技術向上に大変に有意義だった。
- ・プロによるアプローチ、パットの指導は、様々なケースを想定しての指導であり、初心者指導に役立つ内容が多く有意義だった。
- ・ラウンドの機会を十分に確保いただき実践的研修が充実しており、技術向上に役立った。また、個別練習の機会を確保いただき、練習場での打撃練習が自由にできたのは大変有意義だった。
- ・練習場も使い放題で良かったが、しいて言えばエキストラの3コースがもう少し整備されているとよい。

V. 全国大学ゴルフ指導者研究会総会資料

1. 2022年度（令和4年度） 収支決算報告書

理事会202301-資料4

全国大学ゴルフ指導者研究会 2022年度（令和4年度） 予算執行状況

(2022年4月1日～2023年3月9日)

2023年8月15日作成

収入の部

(円)

項目	2021年度決算額	2022年度予算額	2022年度決算額	備考
年会費	72,000	120,000	39,000	3000*13
助成金・寄付金	20,000	10,000	30,000	広告費予定(井原ゴルフ倶楽部・プロツアースポーツ)
利子	-	0	-	
研修会残金	-	0	-	利子
当期収入合計	92,000	130,000	69,000	
前年度繰越金	143,180	54,833	54,833	
収入合計	235,180	184,833	123,833	

支出の部

(円)

項目	2021年度決算額	2022年度予算額	支出額	備考
研究会誌作成費	50,000	50,000	26,777	70部
通信費	10,980	20,000	13,114	会誌送付費
研修会開催費	115,470	60,000	22,920	
交通費	-	0	-	
会議費	-	5,000	-	
広報費	3,457	3,500	3,457	DRG (F.A.I.N.), 350 (ターナー)
借入金返済	-	0	-	
雑費	440	1,000	2,576	封筒・インク・ゴム印
当期支出合計	180,347	139,500	68,844	
次年度繰越金	54,833	45,333	54,989	
支出合計	235,180	184,833	123,833	

会計帳簿、証拠書類を監査した結果、上記、収支決算書が相違ないことを確認いたしましたので報告致します。

2023年 9月 8日
監事

金田 晃一
仲 立貴



2. 2023年度（令和5年度） 予算

理事会202301-資料6

全国大学ゴルフ指導者研究会 2023年度予算案及び執行状況

(2023年4月1日～2023年9月14日)

収入の部

(円)

項目	2022年度決算額	2023年度予算額	2023年度執行状況	備考
年会費	39,000	70,000	-	
助成金・寄付金	30,000	30,000	-	
利子	-	0	-	
研修会残金	-	0	-	
当期収入合計	69,000	100,000	-	
前年度繰越金	54,833	54,833	54,833	
収入合計	123,833	154,833	54,833	

支出の部

(円)

項目	2022年度決算	2023年度予算額	2023年度執行状況	備考
研究会誌作成費	26,777	0	-	
通信費	13,114	0	-	
研修会開催費	22,920	60,000	-	
交通費	-	0	-	
会議費	-	0	-	
広報費	3,457	3,500	3,457	1886 (ドメイン)、1571 (サーバー)
借入金返済	-	0	-	
雑費	2,576	1,000		
当期支出合計	68,844	64,500	3,457	
次年度繰越金	54,989	90,333	51,376	
支出合計	123,833	154,833	54,833	

VI. 会則・会員名簿

全国大学ゴルフ指導者研究会会則

[総則]

第1条 本会を全国大学ゴルフ指導者研究会と称する。

第2条 本会は、大学ゴルフ指導者の養成、並びに研究と研鑽を支援し、ゴルフを通して、学生のよりよき発達に寄与する事を目的とする。

第3条 本会の本部は、原則として事務局長（常務理事）の所属機関に置く。

[事業]

第4条 本会の目的を達成するため、次の事業を行う。

2 研究、および研修会の開催。

3 機関誌の刊行。

4 公認指導者の認定

5 会員の研究に資する情報の収集と紹介。

6 支部、および研究グループの育成。

7 その他本会の目的を達成するために必要な事業。

[会員]

第5条 会員の種類を正会員と賛助会員の2種類とする。

2 正会員は、大学ゴルフ指導者、または本会の趣旨に賛同し共に活動しようとする者で、会費を納入した者。

3 賛助会員は、本会の趣旨に賛同し、その育成後援に協力する者で、年会費を納入した者。

第6条 入会・退会は、次のように規定する。

2 本会の趣旨に賛同し入会を希望する者は、正会員1名の推薦を受けて所定用紙により、事務局もしくは役員に申込みを行うとともに、会費を納入する。

3 退会を希望する者は、事務局もしくは役員に退会の申し出をする。また、会費を2年間納入しない者は退会したものとする。

[役員]

第7条 本会の事業を運営するために、会員の中から、会長（1名）、副会長（若干名）、理事長（1名）、副理事長（1名）、常務理事（若干名）、理事（若干名）、監事（若干名）を総会において選出する。

第8条 会長は、本会を代表し会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、これを代行する。

理事長は、理事会会務を総括する。

副理事長は、理事長を補佐し、理事長に事故あるときは、これを代行する。

常務理事は、運営、その他の日常の会務を執行する。

理事は、会務を執行する。

監事は、会計を監査する。

第9条 役員任期は3年とし、再任を妨げない。

第10条 本会に名誉顧問・名誉会員を置くことができる。

2 名誉顧問・名誉会員は役員会で推薦し、総会において承認する。

[総会、役員会及び理事会]

第11条 本会に総会を置く。

2 総会は、本会の最高決議機関であり、会長が招集し、出席会員をもって構成する。

3 総会は毎年1回開催し、役員を選出及び本会の運営に関する重要事項を審議する。

4 総会での審議事項は、出席会員の3分の2以上の賛成により決議する。

第12条 本会に役員会を置く。

2 役員会は会長が招集し、会長、副会長、理事長、副理事長、常務理事（事務局長、副事務局長）、理事、

監事をもって構成する。

3 前項の規程にかかわらず、会長が必要と認めたときは、役員会にその他の会員を加えることができる。

4 本会の事業・運営に関する重要事項を審議する。

第13条 本会に理事会を置く。

2 理事会は理事長が招集し、理事長、副理事長、常務理事、及び理事長が必要と認めた理事、監事、正会員で構成する。

3 役員会の方針に基づき日常の会務を執行する。

[事務局]

第14条 本会に事務局を置き、常務理事である事務局長、副事務局長を中心に日常業務を執行する。

2 事務局は事務局長の所属機関に、原則として3年間設置する。

[支部・専門委員会]

第15条 本会の業務を推進するために、支部・専門委員会を置くことができる。

[会計]

第16条 本会の経費は、会費、寄付及びその他の収入をもって支弁する。

2 会員の年会費は3,000円とする。

3 賛助会員の年会費は、1口1万円とし、2口以上とする。

第17条 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日とし、会費の納入期限は4月1日から9月30日迄

とする。

[賛助会員に関する細則]

第18条 会は、賛助会員に次の特典を与えるものとする。

第19条 本会が刊行する機関誌の無償送付と、本会が指定する広告の無償掲載することができる。

2 本会が主催する研修会、主たる会議などにオブザーバーとして参加することができる。

3 会員の関連する学会、研究会、講習会への推薦等の便宜を図ることができる。

[広告掲載規定に関する細則]

第20条 広告掲載に関しては、別紙の通り定める。

附 則

1 この会則は、平成15年8月17日より施行する。

2 この会則は、平成22年8月25日より施行する。

3 この会則は、平成23年8月21日より施行する。

4 この会則は、令和3年3月15日より施行する。

2023 年會員名簿

No.	氏名	所属大学	役 職
1	大澤 啓藏	亜細亜大学	名誉顧問
2	辻井 義弘	元・摂南大学	名誉顧問
3	加藤 史夫	元・日本大学	名誉顧問
4	柴田 一男	元・大同大学	名誉顧問
5	竹内 暢子	元・千葉敬愛短期大学	名誉顧問
6	西藤 宏司	元・筑波大学	名誉顧問
7	早田 卓次	日本大学名誉教授	名誉顧問
8	松田 一如	日本歯科大学名誉教授	名誉顧問
9	光永 吉輝	駒澤大学名誉教授	名誉顧問
10	三幣 晴三	駒澤大学名誉教授	名誉顧問
11	積山 敬経	元・大阪工業大学	名誉顧問
12	鈴木 昭彦	高崎商科大学	会長
13	矢崎 弥	東京理科大学	副会長
14	中島 弘毅	松本大学	理事長
15	浜野 学	芝浦工業大学	常任理事（事務局長）
16	佐伯 聡史	富山大学	理事
17	菅生 貴之	大阪体育大学	理事
18	江口 潤	産業能率大学	理事
19	佐古 隆之	日本女子大学	理事
20	山根 真紀	日本福祉大学	理事
21	西村 次郎	岡山理科大学	理事
22	金田 晃一	千葉工科大学	監事
23	仲 立貴	至学館大学	監事
24	藤井 健平	岡山理科大学	
25	下谷内 勝利	駒澤大学	
26	白木 仁	筑波大学	
27	末次 美樹	駒澤大学	
28	市村 史郎	東京理科大	
29	笠井 淳	法政大学	
30	河田 隆	宇都宮短期大学	
31	公文 暉巴	法政大学（兼任）	
32	小島 正行	星城大学	
33	雑賀 亮一	太成学院大学	
34	佐々木 正省		
35	三浦 恵子	梅花女子大学	
36	中山 より	大阪成形造形大学	
37	畑佐 泰子	大阪成蹊大学	

38	深見 和男	日本大学	
39	柳 浩二郎	駒澤大学	
40	柳田 信也	東京理科大学	
41	若林 洋子	茨城キリスト教大学	
42	山中 博史	滋賀短期大学	
43	竹田 幸夫	駒澤大学	
44	棚辺 啓一	茨城キリスト教大学	
45	廣瀬 文彦	白鵬大学	
46	河合 史菜	岡山理科大学	
47	沖 和 磨	日本大学理工学部	

編集委員会

委員長	鈴木 昭彦
副委員長	矢崎 弥
委員	中島 弘毅
	浜野 学

全国大学ゴルフ指導者研究会 第13号

発行日 令和5年 11月1日

発行者 鈴木 昭彦

発行所 全国大学ゴルフ指導者研究会

〒337-8570 埼玉県さいたま市見沼区深作 307

芝浦工業大学工学部電子工学科体育・健康研究室

全国大学ゴルフ指導者研究会

事務局 〒337-8570埼玉県さいたま市見沼区深作307
芝浦工業大学工学部体育・健康学研究室 浜野 学

E-mail : mhamano@shibaura-it.ac.jp



芝浦工業大学

SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Established 1927